

博士學位論文要約

論文題目： 独居高齢者のセルフ・ネグレクトに関する研究

氏名： 鄭 熙聖

要約：

従来のセルフ・ネグレクト研究（特にイギリス・アメリカ）では医学・看護学分野を中心に研究が蓄積されてきた一方、社会学・社会福祉学の分野ではほとんど研究されていなかった。このため、先行研究においては、個人レベルの要因に着目するが、あらゆる障害及び認知機能的に困難を抱える高齢者を対象とした調査が多く、結局意図的・非意図的にセルフ・ネグレクト状態に陥った高齢者は調査の対象から除外し、しかもその原因を解明する際には当事者の視点ではなく研究者による診断及び見立てが主な判断基準とみなされているのが現状であった。日本の場合も、セルフ・ネグレクトに至るプロセスに関する研究はもちろん、当事者の視点に着目した学術研究は見当たらなかった。

しかし、セルフ・ネグレクトに至る背景を探る際に、その状態にある当事者にはどのような思いと経緯が、そして社会との関連性があるのであろうか。それを知ることは、どのように高齢者がセルフ・ネグレクト状態に陥ったかを知り、この問題のメカニズムの解明に迫ることにつながる。セルフ・ネグレクトのメカニズムが明らかになれば、どのような時点でどのように介入すれば良いかが具体化できると考えられる。なお、セルフ・ネグレクト高齢者には「支援拒否」・「支援を求めない」・「治療の拒否・放置」といった特徴がある一方で、彼らに自身のセルフ・ネグレクト状態の認識があるのか、回復するための意志と支援ニーズを持つか否かをより正しく理解するためにも、セルフ・ネグレクト状態にある当事者の思いと心情を詳細に検討することが肝要である。

そこで、本論文では、高齢者が独居や認知症になっても社会的存在として希望と尊厳を保持しながら安全・安心に暮らせる地域社会の実現を目指し、日本のセルフ・ネグレクトへの予防・支援モデルの構築に資する基礎的知見を得ることが目的である。具体的には、当事者の視点に立脚し、セルフ・ネグレクトの発生要因だけでなく、普通に暮らしている人がセルフ・ネグレクトになるプロセスのメカニズムを解明すること、またセルフ・ネグレクト状態にある高齢者の支援ニーズを明らかにすることを目指した。研究目的を達成するため、以下の三つの研究課題を設定した。

研究課題 1：セルフ・ネグレクトに関する先行研究の検討を踏まえて、研究の動向，危険因子，構成概念，定義を明確にする。

研究課題 2：当事者視点に基づき，セルフ・ネグレクトの発生要因とそのプロセスを明らかにする。

研究課題 3：当事者視点に基づき，セルフ・ネグレクト状態にある高齢者の困りごとやニーズを探索的に検討する。

研究課題 1 では、セルフ・ネグレクト概念を明確にすることを目的に、PubMed, CiNii Articles, Kiss をデータベースとして文献を収集し、最終的に高齢者のセルフ・ネグレクトに関する 66 文献を分析に用いた。分析に用いた文献を基に、セルフ・ネグレクトの危険因子と構成概念に関する先行研究を概観した上で、類型化を試みた。加えて、セルフ・ネグレクトの定義に関する検討を行った。まず、セルフ・ネグレクトの危険因子を類型化した結果、「精神・神経・感情・認知機能的要因」「身体的要因」「社会的・環境的要因」と三つに分類することができた。次に、セルフ・ネグレクトの構成概念を類型化した結果、大きく「個人衛生」「健康行動」「居住環境」という三つの上位概念に再構成された。一方、先行研究から抽出された構成概念のうち、不適切な財産管理、孤立、他者との関わり拒否、関係要因、機能状態、行動的特性、日常生活管理要因、全般的なリスク評価は除外した。最後に、セルフ・ネグレクトの構成概念を類型化した結果とセルフ・ネグレクトの定義に関する先行研究の検討結果を踏まえて、本論文では、セルフ・ネグレクトを「行為の意図性に関係なく、不適切な個人衛生と居住環境、あるいは必要とする健康行動の怠慢・放棄により、自己の心身の安全と健康が脅かされる状態に陥ること」と定義した。

研究課題 2 では、「セルフ・ネグレクトの発生要因とそのプロセスを明らかにする」という目的を達成するため、当事者の視点に着眼し、約 10 ヶ月にわたって実際にセルフ・ネグレクト状態にある在宅独居高齢者を対象にインタビュー調査を実施した。調査の結果、独居高齢者のセルフ・ネグレクトに至る発生要因は、【素因（個人的要因）】【危機的ライフイベント】【社会・環境要因】【無気力・生活機能低下】という四つの上位カテゴリーに分類された。また、調査対象者のライフヒストリーとセルフ・ネグレクトの発生要因間の関係などを検討した結果、調査対象者全員が、【素因（個人的要因）】+【危機的ライフイベント】⇒ {【社会・環境要因】⇔【無気力・生活機能低下】} という一連のプロセスのなかでセルフ・ネグレクト状態に陥ったことが明らかになった。以上の結果から、セルフ・ネグレクトの発生要因のなかには、個人的要因のみならず、これまでの研究では等閑視されてきた危機的ライフイベントと社会・環境要因がセルフ・ネグレクトに大きく影響することが明らかになった。

研究課題 3 では、当事者視点からセルフ・ネグレクト状態にある独居高齢者の困りごととニーズを探索的に検討した。その結果、セルフ・ネグレクト高齢者のニーズは大きく、【安全欲求充足のための支援ニーズ】【愛と所属の欲求充足のための支援ニーズ】【尊重欲求充足のための支援ニーズ】という 3 個の上位カテゴリーに構成することができた。具体的には、情緒的、尊厳・尊重、健康、家族関係、物質的、住居環境、社会参加、死後、などに対するニーズが確認された。次いで、それらのニーズをマズローの欲求 5 段階説を援用してまとめた。その結果、支援を受けているセルフ・ネグレクト高齢者であっても彼らの支援ニーズはある段階に留まらない多様性を有し複合的に現れた点、また多くの対象者が【安全欲求充足のための支援ニーズ】と【愛と所属の欲求充足のための支援ニーズ】を有していた点が明らかになった。

本論文では、セルフ・ネグレクト高齢者の心身状態及び生活環境に対する理解を深めると同時に、日本のセルフ・ネグレクト研究に当事者性と権利擁護の視点という新しい知見を付け加えるための考察を行った。なお、なぜ高齢者がセルフ・ネグレクト状態に至った

のかを考える際に、障害や疾患だけではなく、一人ひとりのライフスタイルや生活史を十分に理解し、さらに情報があふれる現代社会のなかで急変するルールや規範に従うしかない社会構造にも目を向けて考える必要性を指摘した。さらに、先行研究の知見と高齢者がセルフ・ネグレクト状態に至ったプロセスに基づき、セルフ・ネグレクトへの予防・支援モデルの構築に向けての学問的知見、かつ予防的視座から支援までの実践的アプローチの方法を提示した。本論文を通して理解できるようになったことは、セルフ・ネグレクトは精神的・認知的な障害を抱える高齢者に限ることなく、普通に暮らす高齢者にも起こりうるものである点である。なお、貧困、孤立、ひきこもり、閉じこもり、無気力、そしてうつなどの広範な領域とセルフ・ネグレクトを結びつけて考えることができることから、今後のセルフ・ネグレクト研究の応用範囲が広がると考えられる。